

浄土

十月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一日發行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授受郵便物第三五二号)
昭和三十七年九月二十五日 印刷 昭和三十七年十月一日發行

第二十八卷

第十号

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料二〇〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料二〇〇円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都千代田区飯田町一ノ二二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

◇正しい信仰は家庭から◇

新版ひめくり

心のあゆみ

A判

価格 七〇円 二二〇円

体裁 タテ 30 CM ヨコ 10 CM

割引 一〇部以上 一割引

五〇部以上 一・五割引

百部以上 二割引

送料 実費

(百部以上より無し)

修養ひめくり

B判

価格 一〇〇円 二四〇円

(一〇部以上より割引あり)

法然上人鑽仰会

東京都千代田区
飯田町1の21

振替 東京2187 電話 (332) 5944

浄土

十月号

わが身わろしとてうたがふべからず。
自身はこれ煩惱具足せる凡夫なりとい
へり。

法然上人御法語



中央アジア・コートンで発
見された仏像頭部(塑像)。

浄土 十月号 目次

表紙 阿弥陀如来像(京都・平等院)

十夜について……………恵谷隆戒(2)

三分間 法話 年 回……………金田明進(6)

浄土の歌声……………武石彰夫(8)

近代 高僧 伝 深見志運……………大橋俊雄(16)

教育 シリーズ 女子教育……………石川孝之(18)

紀行文 アメリカ旅行④……………佐藤治子(22)

扉の御法語……………(5) お念仏の利益……………(14)

表紙の写真……………(15) 聖語揭示版……………(14)

講 話

浄土宗入門 その三……………戸松啓真(30)

——往生について——

編集後記……………(33)

十夜について

恵谷隆戒

(仏教大学学長)



十月といえ、お十夜の月である。お十夜といえ、全浄土宗寺院の年中行事の一つとして、浄土宗信徒の忘れることの出来ない法会である。

ところが、ところかわれば品かわると云う諺がある如く、お十夜の法会も、ところによって必ずしも一様ではない。郷土色ゆたかな、民間伝承の芸能を交えて催されるものもあれば、古式をそのまま伝承した引声念仏、双盤念仏によって、厳肅な仏念行事を催すものであり、また、諷誦回向や、塔婆回向を中心とするものなどもあり、ところによって、種々様々の儀式儀礼が行なわれている。ともかく、何れにしても、お十夜の法会は、他の法会と異なり、

一種のお祭り気分的な情緒が多分にもらわれているところに特色を持つものであるが、しかしそれは、お十夜の真実義を誤ったものであって、必ずしもお十夜法会に添うたものであると云うことは出来ない。

そこで、お十夜の起源並にその意義について述べなければならぬ。十夜と云うのは略称であって、十日十夜と呼ぶのが、ほんとうの名称であるが、それを普通にお十夜と呼んでいるのである。無量寿経巻下に「ここにおいて善を修すること十日十夜すれば、他方諸仏の国中において、善をなすこと千歳なるに勝る」とあり、また阿弥陀鼓音声王陀羅尼經に「もし彼の仏の名号を受持するものあり、その心

を堅固にして憶念して忘れず、十日十夜、散乱を除き捨て、精勤して念仏三昧を修習し、かの如来の常恒に安樂世界に住したまうことを知り、憶念相續して断絶せしむることなく、この鼓音声王大陀羅尼を受持の読誦し、十日十夜六時に念を専らにし、五体を地に投じてかの仏を礼敬し、堅固正念にして悉く散乱を除き、もしよく心をして念々に絶えずらしめば、十日の中に必ずかの阿弥陀仏を見、並に十方世界の如来及び所住の処を見ることを得ん。」とあることに起因するものであつて、十日十夜、一心不乱に南無阿弥陀仏と称えつづけることによって、如来のおかげの中に生かされていることを自覺し、安らいを得た生活を楽しむことが出来るとするのが、お経に記されている経文の趣意である。この経説にもとづいて、十日十夜の念仏が修行されることになったのであるが、日本のお十夜の起源は室町時代の末期に、伊勢守平貞経の舎弟貞国が、永享の頃に十夜念仏を修行したことに始まるのである。

京都吉田山にある真如堂縁起によると、平貞国は若年の頃から念仏生活にいそしみ励んでいたが、たまたま真如堂に、慈覺大師御自作の一刀三礼の阿弥陀如来像が安置してあるところから、世の中の無常を痛感するのあまり、真如堂にお籠をして、三日三夜の念仏を修行した。このとき貞

国は、三夜めの曉けがたに、髪を切つて遁世しようと決意してまどろむ間に、如来の靈告を受けた夢を見たので、遁世のことを思いとどまり、舎兄貞経の家督を相續することになり、家運が次第に繁榮して来たのである。そこで彼はお礼報謝の意味から、更に七日七夜の念仏を修し、前後併せて十日十夜の念仏を修行したのであつて、このことが上聞に達し、十日十夜の念仏を修行する習慣が生れて来ることになったのである。これより以後、真如堂においては、毎年旧暦の十月六日より十五日まで、十日十夜の間、叡山常行堂に伝える引声念仏の作法によって、念仏修行をするようになり、毎年盛大なお十日十夜の法会が行なわれることになったが、その後、後土御門天皇の勅請により、鎌倉光明寺住職、観譽祐崇が宮中に参内して、真如堂の十夜法会を嚴修した。このとき天皇はこの外お喜びになり、鎌倉光明寺においても、この法会を修行することを勅許されたのであつて、爾来鎌倉光明寺においては、年々盛大なお十夜の法会を営む慣習になつていたのである。かようにして、日本全国の浄土宗寺院が、年中行事の一つとして、この法会を修行するようになって来たものである。

前述の如く、お十夜の起源をたづねてみると、お経の中に説いてある釈尊の説法にもとづいて、十日十夜の念仏を

修する方法を云うのであって、十日十夜の間、雑念妄想を起さないで念仏していると、おのづから、如来のおかげの中に育てられ、生かされていることが自覚されて、自然におれがと云う考え方が除き去られ、安らいを得た生活を楽しむことが出来るようになって来るのである。ここにお十夜の功德利益があり、意義があると云うものである。しかるに、我々凡夫は、ともすれば、我見にとらわれ、我慢、我愛、我執にとらわれて来るから、不平、不満の連続となり、とりこし苦勞がつきないことになって、絶えず不安、憂慮、絶望の地獄ぐらしをせなければならぬ。これによって来るのである。これは要するに、自分の力によってすべてが成り立っていると考えるから、自分の氣に合わないときには、不平、不満が起って来るのである。ところが、心静かに、自分の今日ある所以を考えてみるならば、自分の力のみによって成り立っているものは、この世の中には一物もないことに氣がついて来るのである。悉くがもちつもたれつ、たすけあいによって成り立っている、ものの道理に氣がついて来るのである。そうした天地の道理、万物万象の根本法則の中に、育てられ、生かされている現実の姿に氣がついて来れば、いたずらに、自我にとらわれて、私利、私欲をほしいままにすることは許されない

ことになって来る。そこにはおのづから、我見、我慢、我愛、我執の、おれがと云う考え方が除き去られて、世のため、人のために、よろこび働くことが、人間のふみ行うてゆくべき道であると云うことに氣がついて来ると共に、天地のおかげの中に生き働きの得させてもらっている現実を、ありがたい、もったいないと云う、感謝の中に日暮をする氣持が湧き起って来、安らいを得た人生を楽しみ、生がいのある生活をする事が出来るようになって来るのであって、そうした具体的方法を教示したものがお十夜である。したがって、お十夜を、単なるお祭りさわぎで終わってしまったのでは、その意義を没脚するものであって、お十夜は、どこまでも、自己の精神修養の場であり、天地のおかげを感謝し、如来の大悲にいだかれて生活している現実を直視して、報恩感謝の生活をするところに、その意義があるものでなければならぬ。そうした意味から云えば、お十夜は、如来さまに対する感謝祭と云うことにもなるであろうが、お祭り気分のみを盛りあげて、本末顛倒することは、厳につつしまねばならぬ。

★

★

扉の御法語

行すくなしともうたがふべからず。一念十念にたりぬべし。罪人なりともうたがふべからず。罪根ふかきをきはす。時くだれりとてうたがうべからず。法滅已後の衆生なを往生すべし。いはんやこのころをや。わが身わろしとてうたがふべからず。自身はこれ煩惱具足せる凡夫なりといへり。

(小消息、勅修御伝第二十一)

日課念仏幾万ときめていても、また行住坐臥にと思つていても、日常の雑事に追われてなかなか思うようになりません。だからといって往生を疑つてはいけません。何故なら仏さまは一念十念の者すら往生させて下さるからです。また自分の行為を省みて罪深いと感じたにしても、周囲を眺めてつくづく末法だと思つても、往生を疑つてはいけません。仏さまには極悪の人に対しても同じように救つて下され、末法万年の後になり、三宝滅し教法滅した時代になつても、仏さまの誓願によつて往生ができるのですから、まだ現在なら

問題がないわけです。更に自分は悪業深いといつても往生を疑つてはいけません。善導大師のような古今の高僧すら「自分はこれは煩惱具足せる凡夫なり」と申されています。

この御法語は小消息として一枚起請文とともに大切な「黒田の聖人へつかはす御文」の初頭にある一句です。そしてこの御法語で最も有難く拝するのは、善導大師のお詞を引用している点であると思います。

この善導大師のお詞は観經疏散善義にあります。即ち觀經に「上品上生の者とは、若し衆生ありて、彼の国に生ぜんと願せば、三種の心をおこすべし、すなわち往生す。何らか三とする。一つには至誠心、二つには深心、三つには廻向發願心なり」とある個所を説明されている所にあります。觀經疏の中でも三心に関する解説が最も詳しく、ここに重点があるとさえ思われます。有名な二河白道の譬喩もここにありますが、また最も自信に満ちた強いお詞があります。即ち今ここに學者高僧はもとより化仏報仏といった優れた方々が雲の如く集まり十方に徧満して「お念仏を申さなくても往生できる」とつめよってき

ても、断じて疑を持ったりかかる人の説を信じてはならぬと断固たる言葉でしかも詳しく説明されています。そして念仏行者に不退転の自信を持てとはげしくすすめられています。

その中で深心を説明して申されるには、「深心というは、即ち是れ深く信ずるの心なり、また二種あり。一には決定して深く信ず、自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して出離の縁あることなしと。二には決定して深く信ず、彼の阿彌陀仏四十八願をもつて衆生を攝取したまふ。疑いなく慮いなく彼の願力に乗じて定んで往生を得と」とあります。

繰り返して申すなら極樂往生を願うならば「自分は現に罪惡生死の凡夫」であること、とあみださまは必ず念仏する者を願力によつて「攝取したまふ」ことを深く信ずることが根本であるということです。しかもこのことが善導大師の基礎となつていふと思うのです。

だからこそ上人すら自らを愚痴の凡夫と申され、小消息の初めの句に善導大師のお詞を引用されています。この御法語を拝する時、上人と大師とに温い血のつながりを感じます

年 回

— 念仏のこころ —

金 田 明 進

(茨城・弘経寺 住職)

年回法事の読経をすませて、その意義を一言お話することは尊いことだと思います。

先祖さまであろうと、親兄弟、又はわが子であろうと、先き立たれた方々に、今日あとにのこった者たちが、記念のまごころを捧げることは、人の世の美しさと云ってよいでしょう。

習慣や義理でだけつとめるのが年回法事ではありません。亡き方々のおかげを知り、先き立つものの尊い命を惜み、今日の私どもが、それらの方々のいのちを承けて如何に生きねばならぬかと気づかされるのが年回法事の真の意義だと存じます。

お線香について

只今は読経中にみなさんお焼香をされまし

た。浄土宗では、特に日常香をたくことを尊びます。みなさんは今三べん香をたかれたと思います。この焼香の作法は、年回をつとめる人々が、まずこの焼香によって、わが身わが心を浄めるために行うものです。私どもの生活の中で、もののいのちを殺したり、公けのものを盗んだり、男女の道をあやまったり、うそいつわりを語ったりする、身のけがれのあることに気づきますが、これを焼きつくして浄らかな身になりたい、又よくばって自分を利する根性や、腹を立てて他人にあたりにちらす根性や、もの知り顔の自慢高慢のうぬぼれなど、心の中のけがれも数多く反省されますが、これらを焼きつくして浄らかな心となりたい。この身心清浄の願いをまず焼香

の作法によって現わすのです。

焼香は亡き人々のために、わが身わが心を浄らかにして報いる意味のものです。「願くはわが身浄きこと香炉の如くならん、願くはわが心知恵の火の如くならん」と香偈のお経文にありますのもこのこととございます。

三つの目標

この清浄な身と心とをもって、三つの目標に進むことを心がけるのが仏教徒であります。それは「仏法僧の三宝に帰依する」と申しますが、まず第一の目標は正しい信仰をもつて明るい生活をうち立てることです。迷信をなくし、盲信をしりぞけ、今日の正しい学問の考え方と矛盾しない正しい仏教の信仰であります。一口に云えば、夢を見たり、ねぼけたりする状態でなく、ハッキリ眼をあけた信仰です。これを「仏に帰依する」とも申します。

第二の目標は仏教の教を尊ぶことです。それは私共が、常によく聞き、よく考えて勉強してゆくことです。勉強は学生時代だけではいいのです。わが子を育てるにも、会社の仕事をやるにも、農業をやるにも夫婦の道を歩

むにも、経済生活をやってゆくにも、みんな勉強研究を怠ってはなりません。仏教の教えをよく身につけていくことです。これを「法に帰依する」と申します。

第三の目標は和合ということです。仲よくすると申しますが、まず家族の人々が、ほんとうに心から睦み会うことです。お互に自分のわがま、を立て、は和合は成り立ちませぬ。夫は妻のおかげで、妻は夫のおかげで、若い者は老人のおかげで、老人は若い人のおかげでと感謝し合ふ生活が、和合の生活となるのです。この心もちが近所の人たちにも、又職場にもひろがってゆけば、仏教で云う「僧に帰依する」生活となるのであります。先祖さまのおかげで、社会文化のおかげで今日働きうるのだ、ありがたい！と信じられるほど幸せなことはありません。

これを三宝に帰依する生活と申します、即ち明るい信仰をもち、正しい考え方を育て、仲よく働いてゆくことです。これが仏教を信するものの共通した生活のめじるしであります。

念仏のこころ

以上、焼香の心得と三宝に帰依することの

お話をしましたが、そのような立派な心掛けは、わかっていても、仲々実際にはもちにくいのものです。夢みる楽しさにあこがれたり、アルコールの陶醉を望んだり、お話をきいたり、本をよんだりすることをめんどろがったり、自分勝手の考えを他人に押しつけて仲よくできないのが私共の日常です。立派なみおしえがありながら、これを受けつけないのが凡夫の悲しさです。それだから法然上人は、愚から凡夫の私共のために念仏の道を開いて下さったのです。法然上人は私共に、どんなに学問があっても、一文字も知らない、小一年生のような、素直な心もちになって、念仏申せと教えられました。本当に私は間違いだらけの人間だ、申訳ない！という深い反省心をよびおこさなければならぬ。そこにナムアミダブツと念仏を申す素直な私が生れてくるのです。

この念仏が、亡き先祖父母に対する感謝となり、先き立った人々に対する本当の追善に

なると存じます。

正しい信仰を

そこで年回をつとめて、更に力強い心構えが追加されねばなりません、それが追善と申すことです。このごろ新興教団の云うような、この教団に入れば必ず病気が治るとか、生活が今よりらくになるとか、自分に都合のよいことだけで満足するのは正しい信仰ではありません。病気のときは適切な医療をうけ、心安かに静養につとめるのです。生活の中に苦悩があれば、しっかりした心構えでその苦悩を堪え忍び、それを克服して行くのです。人間にはどんなに善いことをしてもかえって苦しみを受けることもあるのです。むしろ世の悩みをすべて引き受けても悔いいることのない強い信仰が必要です。

念仏の道は、この愚かなか、弱い私どもに力強い信仰が生れる教えです。どうか、この年回法事を機会に更に一步深い正しい信仰の進めて頂きたいものであります。

三分間法話

その二

浄土の歌声



日本の仏教歌謡史をしらべてみると、和文で書かれた和讃の類が、一度にその花を開いたのは平安朝中期からだということが分ります。そして、その歌声の過半数は、いずれも浄土教に関係の深い和讃でありました。

大体、平安末期という時代は、今様を始めとして各種音楽が社会の上下を通じて盛に行われ、一方、仏教音楽たる

武石彰夫

(大東文化大学講師)

声明の隆声も一きわ高いものがあつたのです。御白河上皇は、「大原流声明糸譜」という本によると、良忍上人の弟子家寛法印を師として、この道の奥義を極められたことが判明しますし、遊サン前について今様の習得にも専念され、「梁塵秘抄」十巻「口伝集」十巻を撰せられ、今様の一大集成をされたことは、日本の歌謡史上忘れることのできない偉業とされています。

もと／＼、浄土信仰と関係の深い和讃が、こういう状況の中で、新らしい浄土教団の中に、上り積極的な意味をもって取入れられたということは、十分注意しなければならぬ事実と思われまゝす。

法然上人は、

「本願ノ妙理ヲアラハシ、念仏ノ気味ヲマサンガタメニ、五音ヲトトノヘ、七声ヲタダシクテ、依正ニ報ヲ嘆ズベシ、シカレバ聴聞随喜ノタグヒ、入宗ノ方便トナリスベシ」

と云われ、声明を入宗の方便とされたのです。上人のお弟子の声明の達人に上つて、多くの男女が入信結縁し、特に婦女子の帰依するものが多く、宮廷の女房たちの心をゆさぶるほどであったといわれております。

これは「徒然草」で兼好が、

「六時礼讃は、法然上人の弟子、安楽といひける僧、経文をあつめてつくりてつとめにしけり」

と述べていることでも分りますが、大体「六時礼讃」は唐の善導和尚の作で、昼夜六時（晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜）に弥陀に礼讃する偈であり、兼好の記憶違いかとも考えられます。この「六時礼讃」の歌い方は当初は、多分に即興的な節づけであつたらしいのですが、「法然上人行状絵図」三十三に上りますと、

「（前略）上人の門徒住蓮安楽等のともがら東山鹿の谷にして、別時念仏をはじめ六時礼讃をつとむ。さだまれるふし拍子なくおの／＼哀歎悲苦の音曲をなすまま、め

ずらしくたふとかりけれ」

とあり、そのメロディーは非常に情緒的で、人々の魂にうつたえるが如きものであつたことが知られるのであります。

これは、建永元年のことですが、すでに、この十四年前の建久三年の秋、御白河院の御菩提のために、八坂の引導寺において、心河弥陀仏の調声、住蓮安楽らの助言で「六時礼讃」を修したことが記されており、これが「六時礼讃」苦行のはじめであると書かれているのです。

（法然上人行状絵図巻十）

天台座主を何度もつとめ、平安末期から鎌倉初期のはげしい社会の変遷の中で、批判的な史論書「愚管抄」を書いた慈円は、安楽房と住蓮が、善導和尚の「六時礼讃」を「タテテ」用いた所、尼たちが帰依渴仰したことをこの著の中で述べています。

宗教と音楽とは、古来密接に関係にあるものですし、たとえば、カトリックのグレゴリアン聖歌の如き、神をたつえると同時に、己の信仰を告白し、さらに神への帰依を深める要素をも持っていることでしょう。プロテスタントの礼拝では讃美歌は非常に大きな役割を占めています。そして、歌っている人々の心は、その豊かなメロディにのっ

て、宗教感動にひたっていることでしょう。

「六時礼讃」中、日中礼讃の「三尊礼」はあらゆる仏教讃歌の中で、最も音楽的であり殉情的なものといわれていますが、当時のメロディーが、正しく情緒な人々の心にやきつき、不安やるかたない社会に細々と生きなければならなかった人々の傷心を捉えて、浄土入宗の機縁を作ったであらうことは、十分意味のある所といわなければなりませんまい。

さて、それでは和文に上って綴られた和讃は浄土宗において、どのように用いられていたのでしょうか。

これを知るのは、やはり「法然上人行状絵図」四十八によるのがよいでしょう。それは法性寺の空阿弥陀仏のことです。彼は、一向専念の行者となって、読経も行わず、礼讃をも唱えなかった、称名にのみつとめていたのですが、念仏のおわり毎に、

此界一人念仏名 西方便有一蓮生

但使一生常不退 此花還到此間迎

娑婆に念仏つとむれば浄土に蓮ぞ生ずなる

一生つねに退せねば

このはなかへりてむかふなり

一生の勤修は須臾の程

衆事をたげすてねがふべし

ねがはゞかならず生れなむ ゆめ／＼怠る事なかれ

光明遍照 十方世界 念仏衆生 摂取不捨

と唱えたとあります。これによって和讃が念仏に添えられて用いられたということが分るのでありまして、初期浄土教団の念仏勤行の実態を知る資料となりました。空阿弥陀仏の唱えた和讃は文讃といわれるものですが、これは果して彼の作であるかどうか。キメテになる資料がないので何ともいえませんが、「明義進行集」では「此等の文讃」といっていますから、もう一つ前の、「如来尊号甚分明 十方世界普流行 但有称名皆得往 観音勢至自来迎」の四句をも併せた呼称であることが知られます。文讃とは讃文の意であると考えておいてよいでしょう。そして、重要なことは、この時期には「となえもの」として用いられたというところで、うたわれ所まではいっていなかったと考えられることです。たとえば、フシがつけられていたとしても本当に簡素なものであったろうと考えられる訳です。よく親鸞の三帖和讃が、第一句目を一字あげてかいてあるからというだけの理由で、仏前調誦が行われていたかの如く説く人がいますが、現に高田に伝わる最も古い本など、相当大きいもので、聖教として用いられた面が強かったとも考えられ、やはりとなえものとして見る方が当たっているようです。

さて、法然上人は、

「源空は智徳をもて人を化するなを不足なり、法性寺の空阿弥陀仏は愚癡なれども、念仏の大先達として、あまねく化導ひろし。……」

と云われたのですが、これは空阿弥陀仏の称名念仏と和讃の行儀が多くの無知なる人に広められていたことを物語るものでありましょう。

次にすこし進めて、源信作の「極楽六時讃」「来迎讃」

が浄土宗で可成多く用いられていたことを挙げましょう。

人、平安朝の古和讃を称して、王朝の新体詩といいますが、これはある意味で、面白い見方だと思われまゝ。その中で、「極楽六時讃」はダンテの「神曲」の天国篇にも比すべき長篇の詩でありまして、阿弥陀仏の来迎にあずかつて極楽浄土に往生した行者が、六時それぞれに、自分の眼に映じ、又耳で聞いた事ども、その土の莊嚴を歌いあげたもので、すでに平安末期貴族たちがこの上なく愛好し願生西方にかられた様子が分ります。それは「栄花物語」音楽の巻がこの和讃を文章中に引用していることでも分りますし、藤原俊成の歌集「長秋詠藻」には、この和讃の句を詞書とする歌が十九首も収められているのです。

さらに、断簡ですが、院政期頃の経本の裏にこの和讃が記されているものも、現に大東急文庫に存在しています。

「明義進行集」という本を見ますと、法然上人のお弟子遊蓮房が、

「極楽六時讃ヲオボエテ時ヲタカヘズ誦シテ念仏ヲ申サレケリ」

とあります。「時ヲタカヘズ」というのですから、昼夜六時にキチント、念仏の助業として唱えていたことが分るのです。

ここに冒頭の一節晨軸讃を引いてひましましょう。

往生極楽コトバニハ

イヘドモ心ハトドラズ

自カラココチニネガハシキ

コトニオモヒヲカクベシ

臨命終ノトキイタリ

西方界ノ虚空ヲ

ハルカニ見レバ大光雲

山ノゴトクシテオコラム

弥陀如来諸化仏

観音勢至諸薩埵

無数ノ賢聖天人衆

ヒカリノ中ニミチミテリ

暮ノカベノヒガシニ

ヤウヤク覆ガゴトクナリ

光雲ヤウヤク近ゾキテ

コエコエ我ヲホメタマハム

ツヒニ引接シタマヒテ

金蓮台ニ坐セシメ

スナハチ仏後ニシタガヒテ

安養浄土ニ往生セム（後略）

誠に眼をとじて、極楽浄土の夢の世界に西方を願う貴紳上下の人々を捉えずにはおかなかった描写がつづくのであります。

現代の私たちにとっては何かピタリしないことかも知れませんが、当時の人々にとっては、全く新鮮な言葉ざわりでもあり、念仏行を助ける讃仏歌であったに相違ないと思われるのです。

尚、時衆の徒にも早くこの風が伝っていったので、それは、藤沢の遊行寺に二祖上人他阿真教の筆写された「極楽六時讃」があることでもハッキリします。

次に、「法然上人行状絵図」によりますと、聖光房弁長が、臨終に際して、

「門弟をあつめて、来迎の讃を誦し念仏せしむ」

とあります。又、聖光上人の高弟了慧上人の「聖光上人伝」にも同じことが記されており、この方は、「来迎讃日念仏三昧現前此句肝要也」としてあり、十分信頼し得る事実と考えられます。

「来迎讃」は修辞豊かで、美しい詩ですが、臨終に弥陀勢至観音諸聖衆の来迎にあずかって極楽へ往生することを歌ったもので、短編ではありますが、よくひきしまった構成がとられ、源信作を信じてよいと思われる作品です。

聞バ西方界ノソラ

伎楽歌詠ホノカナリ

見レバミドリノ山ノハニ

光雲ハルカニカガヤケリ

と始まっています。この和讃は、非常に広く流布したもので、中世の武士たちが、死にのぞんでこの讃によって安らかに往生したことは、例えば「一遍聖絵」などにも見える所です。あちさかへ道が入水に際して、下僕に、「なんちらつゐに引接の讃をいだすべし」と命じたことは当時名高い話として伝ったものでしょう。

法然上人作として「天台霞標」中に「涅槃和讃」と題したものがあり、百二十四句にわたって涅槃の有様をくわし

く述べているのですが、学者のしらべでは、上人のお弟子のだれかが作ったものではないかということになっているようです。

又、聖光上人作の「善導大師和讃」が伝わっています。上人作を疑う学者もありますが、中にはすぐれた表現も見られ、キメ手となる資料はないようです。

時代が下って江戸となると、浄土宗の諸師たちによって、多くの和讃が製作せられました。

これらはいずれも、称名の助業として、民衆布教用として教化の面に実質的に使用されたものなのです。

先ず、無能上人の作四編が挙げられます。その日課念仏は多くの人を化したのでありますが、わずか三十七才で安養浄土の人となったのです。「いろは和讃」「発願和讃」

「帰命本願和讃」「浄土生蓮和讃」は上人の作であります。

ついで、諦忍律師の「阿弥陀如来和讃」が挙げられます。よう。律師はこの和讃をつぶさに註せられ「集註」三冊となっていますが、極めて精細なものであり、教化伝道に和讃の価値を重んぜられたことと相まって高く評価すべきであると考えられます。

特に巻尾に、「和讃分科」の一章を設けて自作の和讃に

ついてその構成―構想をのべ、「三国偈讃考」として、仏教歌謡概史を書いています。恐らく、この方面の最も早い論文ではないでしょうか。勿論、資料的な不備は当時のこととて、仕様がありますまいが、梵、漢、和に分けて極めて要領よく記述しているのです。

以上、要するに浄土教団の成立史の中で、和讃が如何に多く用いられてきたかを述べたのでありますが、仏教と音楽は非常に関係深く、特に浄土の莊嚴を描いた經典には、そこに音楽美をも取り入れておりまして、眼で見た時に絵画となり（例えば、弥陀来迎図のような）耳できくときには音楽（声明）となって人々の魂を救ってきたのでありましょう。

その意味で、新らしい浄土の歌声が起ってよい時期であり、それをもって、もっと民衆の中に飛こんでゆくべきであると思います。私は、新らしい仏教音楽を受け入れる基盤は民衆の側に用意されていると思います。特に次の世代をになう青年の皆さんに理解してもらうには音楽が一番よいのではないのでしょうか。

すでに一方では、仏教詩の口語訳も行われているのですから。

新々しい仏教音楽のメロディーは、素人の私に云わせるならば、ヤハリ、夫々の目的に応じて作られるべきであらうと思います。礼拝用には莊重さがなければいけませんし、信仰の歌は、心の安らぎと希望が感じられるようなものが望まれます。又、若い人たちのためには明るいものが欲しいと思います。

モット、ホームソングのような気易いものもあってよいでしょう。

私たちは、過去における仏教歌謡の受容ということに関心を持って、現代に生かす道を考えるべきだと思うのです。

(37・7・20 稿了)

お念仏の利益

仏と教えと教団との三つに帰依するものを仏教の信者であるといえます。これを一言にしているならば、念仏行者がこれに当たるとい

うことになります。

仏とは悟りを開いて、人々をめぐみ救い給う方であります。教えとは、その仏の説き給うた教えであります。教団とは、その教えによって正しく修行するところの和合の団体であります。しかし仏と教えと教団との三つは三つでありながら、離れたものの三つのことではありません。仏は教えに現れ、教えは教団に実現せられるものですから、この三つは実は一つことであります。従って教えと教団を信することは、そのまま仏を信することであって、仏を信すれば、そのまゝ、教えと教団を信することになります。

このように仏を信することは、お念仏を申すことでもありますから、お念仏を申す人には

すべて教えと教団を信する人であります。

仏はすべての人を自分の子供の如くに愛されますから、人もまた子供が親をおもうように、仏を念ずるならば、悟りが得られて仏の救いが得られます。

こうして仏を念ずるものは、つねに仏の光明におさめられ、また自然に仏の香氣にそまります。念仏を申しながら生活する人は、実にこの光りと香りによって莊嚴された生活を送っていることになります。

この世の中に仏を信するほど、大きな利益をもたらすものはありません。もし仏の御名を聞いて、ただ一念だけでも、信じ喜び勇むならば、この上ない大きな利益を得たものといわねばなりません。

◆ 聖語揭示版 ◆

語は善きものをのみ言いて

悪しきを言うことなかれ

善きを言うはよけれども

悪しきを言うは憂あり

写真の紙表

明るい美しさ

阿彌陀如来像 京都平等院

宇治は昔から景勝の地であり、公家の別荘が造られたところである。

現在の平等院は関白藤原道長の別荘であった。それを子息の頼道が譲り受け、永承七年（一〇五二）に平等院という寺にした。

天喜元年（一〇五三）には阿彌陀堂が、ついで法華堂・多宝塔・堂塔伽藍が建立されたが鎌倉時代以後宇治川をはさんで行われた数回の戦火によって消失し、現在では阿彌陀堂（鳳凰堂）・観音堂を残すばかりである。この優雅な姿は寝殿造の影響を受けたものともいわれているが、その形は当麻曼荼羅などに見える宮殿と同様であって、遠く西域の地の建築様式が日本化したものと考えるべきであろう。それにしても建築家の名さえわからない。



平安貴族の信仰は、生前は天台、真言などの祈禱に頼り、死後は浄土往生を願うという有様であった。この思想はますます盛んになり、この世に極楽を実現しようという考えにまでなっていた。

縁折りなすなだらかな山々をぬって流れる美しい宇治川、この川岸にさらに池を造り、中堂から左右に長く翼廊を張り出し、その両端に棲を設けた優美な姿、しかも綺羅をつくした華麗な装飾は、伝説化されている鳳凰がまさに飛び立とうとしている姿であり、鳳凰堂（後世）とはよくもつけた名前だと感心させられる。

自然的な美しさの中に、人為的な美しさを十二分に発揮した鳳凰堂を、当時の人々が西方阿彌陀如来の極楽浄土と考えたのも無理はない。そして当時の貴族達は、前の池に船を浮かべ、弥陀堂に安置した阿彌陀如来を拝んで、ちょうど弥陀の浄土に生れたような快悦にひたつたものであろう。

写真の阿彌陀如来像は、この堂の本尊である。膝の上に弥陀の定印を結び、七重の蓮華座の上に坐ったこの像は、天喜五年（一〇五三）

仏師定朝が作ったものである。従来とかく外国の影響下に発展して来たわが国の彫刻様式を、まったくこれを離れた純粋な日本独自の様式にまで昇華させた彼の功績は大きい。そしてこの作風はながく後世まで定朝様式といわれて如来像の軌範となった。

ふっくらとした顔に美しい眉、中半開いた目に庶民的な鼻、顔面の微笑をより強調している小さな口もと、どの一つをとってみても慈悲に満ちた穏かさがある。しかもそれは顔だけではなく、体を覆っている衣にまで表われ、露出された皮膚の表面までが動いているような感覚を与え、自然な明るさと、整えられた美しさに満ちている。

遠い昔に四十八の願を立て、どんな極悪人でもお念仏を称えれば極楽に往生させて下さる理想像としては、まことにうってつけの仏像である。

私は無宗教だとか、極楽はあるとか無いとか寝言をいう人々でも、この環境でこの阿彌陀様とお見合すれば、たちまちトロケテしまうだろう。

鈴木成元

近代高僧伝

深見志運

大橋 俊雄

尾張の丘陵がゆるやかに台地性をくりひろげて矢作川に接するところ、その下流に西三河平野がひらけている。野中の一隅碧海郡新堀村に、志運が深見喜兵衛の四男として生れたのは天保六年八月十日のこと、家は代々門徒宗でお条（大谷派）にぞくしていた。しかし何となく浄土宗が好きであこがれ、嘉永七年八月には九品院求道の門に入って出家し、行儀を学んだが、後に上京して泉谷の湛忍について宗学を受け、文久元年一月には志をたてて律院に入り、昌光律寺の海印について沙弥戒を受けた。時に二十七歳、この夏大槎律庵に入り、明治十五年十一月具足戒をうけ岡崎の昌光律寺に住したのは同十九年九月のことであった。以来持戒し、専ら伝道教化に力

をつくされると共に、その昔印度の阿育王が八万四千の塔を建てて仏法を弘められた芳躅を慕い、自分も生存中八万四千の宝塔をたてて民衆を教化したいと江州の阿育王塔を拝して強く心に誓いを立て、先ず最初に昌光律寺に建塔、次いで因縁ある寺々に塔を建てられ、又菩薩の四無量心の中の慈無量心の広大なることを思い慈無量講を組織した。そして富貴の信者たちから米財を集め、得られた浄財は貧困の者に分ちあたえ懇ろに伝道教化したのであった。この講は三河尾張の各地に設けられ、その利益を蒙るもの実に夥しい数にのほったというが、其の慈善の徳に深く感じて陰に陽に応援されたのが颯田本真尼であり、二十四年濃尾の地方をおそった大地震の

時の如き、彼が罹災者に物品衣類などを施しあたえようとして遠近の信者に呼びかけた時、浄土教報社は最先にこれに賛同して義捐金を送った。本真も極力この義舉に協力して応援されたが、援助のあたたかい手をさしのべられた人達は涙を流して喜び、尊敬し感謝したという。本真の大慈大悲の菩薩行も一にこれが動機ともなったのである。

曾って在洛中学んだ泉谷西寿寺も維新の訪づれと共に、廃仏毀釈の波がおそってきた。時の住職賢良は湛忍の弟子であったから、志運にとって賢良はその法弟にあたっていた。彼は当代稀れにみる傑僧で学問も深く見識もあつたが、余りにも才智が働いたせいが、仏教の前途に見極めをつけ、往寺を廃寺にし、自からは東京にでて駿河台のニコライ堂に入つて外国語を勉強し、やがてはアメリカに渡り、西洋の文物を究めたいと思つていた。かくて上京の途法兄志運を訪ね、時に賢良が「学問的に見るとキリスト教は、その深さにおいて仏教に心敵することはできないでしょう。その点では、キリスト教何ぞ恐るるにたりない。しかしキリスト教は力強い組織をも

っているので、将来宗教界を支配することに
なるかも知れない」と語ったところ、すかさ
ず「仏教は決して滅びはしない。宗教の興廃
ということとは組織の力にあるのではなくし
て、ただ僧侶自身精進努力にあるのだ、仏教
界をしょって立つ程の立派な人物さえ出さえ
すれば仏教は必らず興隆できること疑い得な
い。私は人物の出現こそ切にのぞんでいる。

仏教の興廃は一人一人の僧侶自身の責任にあ
るのだ」と、声を大にして極力彼の非をとが
めて、思いとどまるように説いたという。に
もかわらず賢良は上京し、外国語を熱心に
学んだが、不幸にして大折し、西寿寺また廃
寺となり、すっかり荒れはててしまった。こ
れを目にし耳にした人の心や、如何ばかりで
あったろうか。その後寺は阪根弥兵衛の助力
によって立派に再興できたけれども、これに
は志運と諦真尼の力もあづかって大であっ
た。彼は毎年かかさず三河から泉谷に来て説
教されたが、復興当初のとき集るもの僅か
に三人のみだったという。以来年々布教に耳
をかす人も次第に多くなり、数年後には堂に
あふれるばかりの聴衆者を迎えた。これとい

うのも一に彼の護法の念つよく、仏法を興隆
することによって思想善導することができ
るという、信念をもって興隆に力をそそいだあ
らわれであった。

そして弘法の念あつく持律の生活を送られ
ていた。或る時摂津在にあった二階堂に戒誓



大願を訪ねたことがあった。談たまたま午後
にまでおおよび羊羹にお茶を出されて供養され
たが、時に彼は「私は午後には何も頂戴いた
しません」と答えたという。律では午後は食
事をとってはならない掟になっていた。従っ
て律院生活を送っていた彼は、毎日を厳しい
浄土律を策勵して居り、南山の二百五十戒を

守りつづけていた。時に戒誓は「食う食わぬ
は貴僧におまかせします。しかし供養だけは
お受けするのが宜しい」と申されたという
が、戒誓にして見れば食べるか食べないか、
口にするかしないかは志運のお心に任せはす
るが、手にとるということは一応の礼儀とい
うものだという心情から「供養だけはお受け
してほしい」と申されたのであったが、志運
はそれはともかくとして律院に生活している
以上、手にすることすら遠慮したいという考
えであった。そして尚も「在家でも、このよ
うなことを言いつけていますから」と拝受を
固辞されたというほど、厳しく持戒策勵し
た。どちらかといえ一徹ともいわれるほど
の清僧であった。

かくて多くの人たちから尊敬をうけ、念仏
の弘通につとめられて陰徳を積まれていた彼
も、明治二十六年春緒川善導寺での受戒会を
終って発病し、大槌律庵で療養されたが、五
月二十九日安養の浄土に旅立たれた。時に春
秋五十九、法名を志運懸通知上といい、墓碑
は「大慈塔」と呼ばれ、寺の東山に建てられ
た。

女子教育



石川孝之

(京浜女子大学附属高校 教諭)

て社会人となったばかり。又は高校在学中なのである。そして更にこれらの時代の少年達によって生れる犯罪は一向に減りそうにな

親に何等有効な教育的価値を残さぬ事となる。教えないで「そうしない」というのはあまりに苛酷である。

教育の機会均等という事が、女でも男と同

日本の女性は、長い間教育という重要な部門に於て男性より劣位に置かれて来たが、歴史的変革期を迎え、新憲法に則った教育基本法によってその機会の均等が実施されることとなり、今日早や十数年を経たのであるが……。その開華はこれからであり、更に暴言するならば、未だに素晴らしい結実は危まれる。新憲法下に生れた女子は今やっと義務教育を終つ

私達親はこれを国の機関にまかせておくだけでなしに充分に再考する必要がある。この問題点は、指導的立場に立つ親の考え方に由来するという事であり、的外れな男女平等の觀念が大人達の間で早くも固定されてしまった傾向があるからなのだ。そればかりでなく古来の養育教育を全て封建的として振向こうとしない。昔を知っているのは親なのである。その経験を全て悪い夢だつたと捨て去る事は

じように進める、更に力さえあれば男と同じように進学して社会に出ても男に劣らず立派にやって行けるといふ考えに移行された。これには何等矛盾はない筈なのに、今時漸く、父親の側から「自分の娘は、勉強は少し位劣っても良いから、素晴らしい性格の家庭婦人となる様に望む」といふ希望が続出して来た。

勿論、女性が立派に社会の一員として職業の一分野に活躍されることは、女性の社会的

地位の向上という意味から結構なことである。しかし内心そうあつてほしいと希うこの様な傾向は、日本の女性を反ってマイナスする点が多いのである。

◇

男女が平等であるとは、その権利という点からの事であり、男女が差別があると言う事は、性の面から不変の真理なのである。体力に差別がある事も同様である。特に女子に於ては前者、即ち「子孫の生産」という点がその根本となるべきだ。これは男女の優劣の問題ではない。この事を忘れて女子の教育はあり得ない。少くともこれは男子が代わり得ない恵であり、この事を二次的に考えるところに女性を偏った方向に迫りやるのである。これこそ平素の親の家庭教育の不行届の結果である。勿論男女はお互いにその立場を理解し合う事が絶対必要であり、この点に於て男女共学が是認されるので、男女共学を第一の条件とする必要はないのである。

今来女子生徒が男子生徒の成績の向上を阻害しているという声が出たり、大学文学部は女子学生の溜り場だと言う「女子学生亡国論」

が華やかである。屢々新聞等に見る亡国論とそれに対する反対論には各々考え方が一人よがりだと思わせる節があるし、そればかりかまるで見当違いや一方的な場合も多い。男子も女子も同じ機会を持てるからと言って強いて、女子の将来の最大の設計である生産面まで無理を来たしてはならない。だから男女共学にしても男女が同じ教育の場で同じ事を勉強する同じ事を行うと言うのは間違いである。因に必須科目である体育についても男子と女子は異なる筈である。女子に無理であるからと言って程度を下げれば、それこそ男子実力向上の障害となろう。私は男子共学に反対している訳ではない。ただその教育技術と言う点で大きな難点を持っていると言いたいのだ。特に女子に取ってマイナスな点が少くない。男女がお互いに理解し合う事は良いがその反面も大いに考えなければならぬ。

親子の対話：「なんです。あなたは女なんでしょう。」「女だから、女だからって何さ。男女同権じゃないの。」大抵の場合ここで終ってしまふ。それが良くないのだ。

女子を論ずる場合に男子を引合いに出すこ

とは女子の特性を考え直すに良い役割を果してくれる。即ち女子は女子としての特性を生かす教育が必要であり、女子としてこうありたいと言う一つの明確な目的を持った教育が為されるべきだと言う事である。

◇

まさか男性への対抗意識をもって発言するわけではなからうが、女性が自分の意見をバリバリと発言するようになったのは昔に見られぬ特徴である。誰でも、美しく着飾った淑やかそうな女性が、町の巷で男性相手に痰呵を切っていたらどうだろう。例えその女性が百パーセント正しいとしても、實際心の中では好感が持てないのではなからうか。更に議論を進めるならば大抵の女性は感情的になつてしまふ。女性は男性が想像出来ない繊細な感情をものすごく大きな感情に膨脹させてあげくのはてに爆発させることもある。

この女性の特徴を有効に有目的に教育するには、精神の教育が第一だと断言出来る。女学校という処は、学問を指導する場というよりも、その精神生活の指導の場と言っても良い。「A子さんが私の悪口を言っている」

と訴えるような事は毎日のように起る。ひつきりなしに起るので面倒になって「ああ、そうか」で済ましてしまうと後でとんだ事になる。一々その不満を解決してやらなければならぬ。「君が言っている事は正しい。しかしAさんが怒っているところを見ると君にも何処が悪いところがあつたのかも知れない。私達は社会生活をしているのであり、お互いが信頼し合つて生活しなければ毎日の生活は暗いものになる。人間の関係は誰の方が悪いと決定出来ない場合も非常に多いし、白黒と決定する必要のない場合だつてある……。」

そう言いはじめるとB子はきまつて、「だって先生、先程も言つた通り私は正しいと思いますと力んで来る。」そこで「いや言い方が悪かつたようだが、君は正しい。正しいとわかれば尚更君はA子さんに対して親切にしてあげなさい。そうすればAさんもその内自分が悪かつた事が解つて、二人は仲良く出来るだろう。若し解らないとしても君の気持は晴れていて少しも暗くない筈だ。相手が悪いとわかっているのに君は尚もそれを責めるのかね。自分の正しい事を主張するより、

相手の悪かつた事を許してやる忍耐強い姿の方が美しいよ。自分の行為は美しかったと自分で味わう位の冷静さがほしいね。君は心のやさしい子だからきつと出来ると思うな。まあ今はお互いにのほせているだろうから少し時間をかけて静かに考え直してみたまえ。」と言つてやる。それから徐々に二人を和合させて行くと言う毎日である。

◇

横浜港での別離のシーン……ある外国の女性
は手離して涙を流して絶叫していた。しかし一方、着物を着た一日本女性が、少しづつ離れてゆく船も見ずに物陰でそつと泣いていた。さぞ悲しいであろうが、他人の目をはばかつて、つつましく涙を拭う姿は、決して古風と言うだけではなしに美しさを感じる。その人の心まで美しく見える。ムシヤグシャすればワーオ、ワァオと叫びなくなり、そうすることが若さの発露だと言う女性が増えたけれど、そのムシヤグシャを自分の心の中で消化して行く精神が必要であり、そうなる事が教育的な成果だと言えないだろうか。苦しい時にやけ酒を飲む。これは最も非教育的な簡

単な逃避であつて人間的な処理の仕方ではない。そんな悪癖が慢性となつて、「カッとしたのでナイフで突いた」などと平然と言う。海岸で若い男女が全身をくねらせてツイストを踊っている。これも逃避でないと言ひ切れない。もっと健康的な処理に仕向けられないものだろうか。

◇

純真に「ハイ」と返事するようになった子は、どんな社会に出て行つてもうまくやつてゐるし、素晴らしい家庭生活を送っている様に思う。「ハイ」と言わせる事は簡単だが、それが心から出る様にするには不断的努力が必要である。この教育には若い体力を充分に出し切つて初めて体得する方法が一番の早道だ。それにはスポーツが良いが、全員がスポーツを行うわけには行かない。そこで私の学園では団体訓練と言う方法を考え出した。初めて公立の中学からやつて来た生徒の言葉の悪い事、規律の乱れている事と言つたらお話にならない。「卒直で明るい」という看板を掲げて、それ以上の何も考えていない。卒直で明るい事も大切だが、美しい人間、美しい

社会を作るためには、美しい言葉と美しい動作が必要なのだ。これを修得させるには言って聞かせるだけでは駄目である。全員を並べておいて「礼」、「礼」と何度も何度も礼を繰り返えさせる。全員が一斉に出来るようになるには一年以上の歳月がかかる。全員がさっと揃う様になるまでは何時間でも終らない。次に校庭を歩かせる。真直に歩くこと、足並を描えて直角に曲ること。これは三年間充分かかる。直立不動。これも難しい事である。千人以上の生徒の内、一人でも頭髮に手をやる。足を動かす者がいればこの教育は達成されない。炎天下四・五人の生徒がその場に倒れる。しかしこれは心配ない。生徒一人一人の健康は毎日調査済みなのである。そして何時間も楽隊の行進曲に合わせて行厳しい進が終ると、その後の疲れはつまらぬ事を考える余地を残さない。純真な心になれる。しかしその反面疲れが人間を怒りっぽくさせ、反対論も続発する。しかし怒ったりなだめたりして何とか三年間が過ぎると礼儀正しい規律ある生徒が出来上る。楽しみはただそれだけなのである。

先日私の級の子供が母を失って友人数名が御焼香に行った。その子には妹がいてやはり学校友達が焼香に来ていたのだが、意外に式が長引いて屋外の日照りに参列するのが耐えられなくなったのだらう。妹の友人達はヒソヒソと話合ったり、体をくねらせたり、ついにはわきにそれてしゃがんでしまう始末だったが、私の子供達は最後まで不動の姿勢で立っていた。後でその態度の立派だった事を賞めたところ「学校の訓練よりずっと楽だ」と言う事なのである。毎日一時間位の訓練がこんな結果になろうとは、我ながら嬉しい驚き

であった。どんな苦しみにも負けない自信が女性にも必要であり、それが日常生活の細かい点にまで及んでいると思われたからである。同じ事に直面しても、「あんな事でくじけるなんて！」と思う事が屢々だが、この辺は女子教育の大きな欠陥のようだ。更にこれは学校の教育方法の欠陥ばかりではない。家庭の熱心な親達が熱心さの余り、方向を間違えているのである。母親同志が熱心に教育を論じ合っている側で、その親達の子は無心にいたずらをやらかしているのである。

会員各位にお願い

- 一、会員五名以上で支部をご結成下さい。
- 二、支部には、支部拡張用としてお申し込み次第無料で見本「浄土」をお送りします。
- 三、支部には、毎月「浄土」を一冊贈呈します。

アメリカ旅行



4

佐藤 治子

(鎌倉・大仏殿 内室)

バースデイパーティー

マリオンの友人のアンのお嬢さんルースのお誕生日に、特別に招待して頂けた。子供さん達のお仲家入りと云うよりも、どう云う風にして子供達が過すかを見せて下さる事になった。

エリザベスのドライブでマウントバーノンを通りアンの家へ着く。アンはあちらの聖心を卒業した旧教の信者である。芝庭にもう何人か小さい子達がきかざってまっている。七才位だったと記憶している。皆、よそ行の洋服をきてエフメルのくつをはいている。

私は、子供達に日本より見えたお客様よといつて一人づつに紹介される。ハローと云う子、ニコニコして一寸頭を下げる子、はにかむ子、それでも小声でハローと云っているらしい。広い芝庭の外に又一台車が止まる。プレゼントを大切そうにかかえて車から一人降り立ったお嬢さん、私を遠くよりみて、はにかみ乍ら近づいて来た。そのお嬢さんのママは車の中より手を皆に振って走り去った。アンがその子供に私の事を話し紹介する。六才か

七才位であつても紹介されると恥かしそうではあるが、「今日は」と挨拶する。私はこう云う礼儀は何才頃から教え込むかしら。特に生れつき社交性をそなへているかのように振舞う外国人の子供達を長年みていた事故、小さな事でも関心をもつてみていた。ルースはプレゼントをもらう度に「サンキュー」と表情も明るく、あちらの習慣ですぐ開けてみる。「まあ、すてき」「何てかわいらしいんでしょう」ともらったルースも、それを見ている他の小さいレディー達も一緒になってキヤアキヤアと喜んでいる。私は皆の顔を見ていたが誰もうらやましいなどと云った顔つきをしない。と云うのは、自分達も又誕生日には祝ってもらえるからだと思う。おじいさま、おばあさまも孫の誕生日の祝いにプレゼントを渡しキッスをしていた。大人の私達は少しはまれに所においてある椅子にこしかけ、遠くからキヤアキヤアさわいでいる小さいレディーの集りをながめている。樹にかこまれた芝生にあつらへたテーブルに紙で出来たかざりがめいめいの所におかれ、アンはお手伝いと台所と庭とを行ったり来たりして準

備している。

やがて「さあ、いらっしやい」と母さんによばれ、皆テーブルについた。ママと、おばあちゃま達にサーヴィスしてもらい乍ら、



プレゼントをもっているルースとお友達（パースディバ）

「お誕生日おめでとう」の日本でもききなれた歌を唱い出した。私も小声でうたった。お母さんのアンと二人のおばあちゃま達は、テーブルにおいてあった色とりどりの紙をとり

あげ、かざりを開くと、かわいらしい帽子になる。それを一人づつに手伝ってかぶらしている。カップケーキにアイスクリーム、そしてお菓子位の、ぜいたくなものではない。

その日は小さいレディー達が主役故、私達は少しはなれた所で椅子にかけ同じ物を御相伴させて頂いた。丁度日本から小さいお人形をもって行ったので、少し大きい方をルースにおめでとうと云って渡し、小さいのを妹のジョイスにおみやげにと云って上げた。上げるものもマリオンに相談し、私を招いてくれた人の心持にそって上げる様にした。

何でもすぐ上げるくせのある日本人を、どうしてあんなにするのかしらと思う外人が多いとか。又逆にこれらに便乗する外人も居るとか耳にしていた事とて、意味なく何か上げる事は、本当につつしまなくてはならないと思っていただけに、おみやげは大したものをもって行かなかった。この時もマリオンにくつかの郷土人形をよい時に、適当に使って下さいと渡しておいたのを二つ又もらって行ったのである。静な住宅街にあるアンの家でのパーティーも、日本でだんだん意識せずし

て、はでになり勝ちの子供達のパーティーとくらべ、両親の祖父母達とママと、そして数人のお友達にかこまれて幸せそうなルースをみて、これで十分なのだと思った。まだ楽し



パースディパーティ。正面の人がアン(立っている人)。

そうに人形をだいたり、プレゼントをみせ合ったりして、さわいでいる子供さん達に「どうも有難う、お元気でね」とサヨナラするエリザベスと私に皆かはいいい手をふって送って

くれたのである。

ニューヨークの日本人

ニューヨークはビジネスの都会であるだけに、日本より出張している会社に働らいている日本の方達はさすがにみおとりはしない。一般に体は小がらでも態度が立派である。各国の人達が入り交つての職業の第一線にうごいている真中に陣どつて、働かれるのだから苦勞も多いことと思う。その上殆んど旅行者が何かと手づるを探し、世話になること故、在米の日本人達には接待と云う余計な仕事がある。

或る夜紹介された三菱銀行の支店長に日本食に招いて頂いた。御会いして見て、実に語学が達者で、その上、アメリカ人の氣質をよくわきまへておられるその態度におどいた。マリオンは「治子、今日はどの着物をきて行くの？プレジデント（支店長）に招かれてデイナーに出るんでしょう」と注意してくれた。あちらの食事に困らぬ私でも「お茶漬サラサラ、」を味いたくなつたのである。夕方きちんと約束の時間に私達を待っていて下さ

った支店長と次長さん、そして私達と四人の会食は予期以上楽しいものとなつた。

読み書きは者派に出来ても、会話が思う様に出来ない為、双方で意見をひれきする事が中々出来にくい方が多いときいている現在、思う存分話が出来冗談も云い、その場の空気を和やかに出来るものをこの支店長さんの態度と会話の中に見出せたのである。ゆたかな話題ははずむ。二人に何か安心感をもち、久々で頂く日本食をゆっくりと味わつたのである。

男の方と同様、夫人方の努力は又大変なものらしい。子供さん達は日本語を忘れかけ、大人の話は分つても、英語で話す。お母さんは学校へもたまには行かなくてはならないであらうし、家庭的の空氣に浸たりたくなる日本からの旅行者も、訪問されれば、くつろがせて上げなくてはならないことになる。日本とちがいお手伝いはやとえないし、やとえても賃金がものすごくたかい。おさしみなど自分で作らなくてはならない。

野村光一先生の夫人の御紹介で親しくして頂いた三菱商事の高安夫人がお友達の三井物

産の手島さんの御宅へ連れて行つて下さつた。丁度松たけの季節であつたので、シアトルから送られたと云う松たけでごはんをたいて下さつたが、「この松たけの香りを子供達にはくさいと云つていやがるのよ」とこぼして居られた。アメリカ生活が長くなると、日本独特の季節の香り、味が小さい子達には分らないのは当然である。

又オペラを観に行く日の夕方高安さんの御宅へまねかれた。お嬢さんがあまりかわいいので、「日本から送つてほしいものは何？」とたづねた。お嬢さんと英語でしゃべる。「キaramelよ」……私はおどろいてしまつた。お母様も又びっくり。お菓子に不自由しないこの六才のお嬢さんは、渡米される前一つづつ紙をむいて口へ入れるあの明治や森永のキaramelを「日本着物のオバサン」と会つて、おもい出されたにちがいない。帰国してから約束をたがえず小さい小包みを航空便で送つたのである。値段の高低など問題でない。幾箱かのキaramelを大事にかかえ、お友達にきつと分けたであらうかわいいお嬢さんと今もふつと思ひ出す。お部屋へちょこん

とよこずわりして、小さい乍ら私にお人形を
みせたり、「お茶を何卒」とかわいいたサヴィ
スをして下さったあのお部屋。そしてニュー
ヨークへと私の心は飛んで行く。

ベストで買物

ニューヨークでベストと云えばぜいたくな
婦人と小児服ばかり売っている七階まである
デパート式の店である。高安夫人に案内して
頂いた。私にはこの精神的にも恵まれ物質的
にもマリオンに世話になっているのでほしい
物は無い。只私を来させてくれた家の者達
に、そして親しい方々に小さいものでもおみ
やげに何かかかいたいと思っていた。高安夫人
はもう長くニューヨークに居られるので英語
も勿論買物など実にお上手であった。或る日
マリオンと電話で打合せて下さって一日私を
連れて下さった。その日はクリヤリングセー
ル(日本のたなおろしと云ったもの)で奥さん
は新聞の広告でちゃんとしらべておかれた。
孫二人の為是非何か買いたかった私は奥さ
んの案内であちこち歩るいた後で「ここよ」と
云われた売場の中の小さい一かくに來た。か

はいいドレスが沢山ある。どれもこれもあか
ぬけていてかはいいい。二人で上からも下から
もひきずり出してみてあれもこれもほしいも
のばかり。半額位か一寸上まわる価いで正規



筆者をバースディに、買物にドライブ
に連れて行ってくれたエリザベス。

のねだんの下に特売の値か明示してある。夏
がすぎたので、どこもいたんだとか云う品物
でないけれど薄着のものをにおいてあるわけ
がある。買いすぎてしまはないように頭の中で

計算し乍ら何点が買った。

ベストの店の箱を下げて歩くのは最も高
段な店で買った事になる。店内には洋服をき
る人達にとってはほしいものだらけの物が上
手にかざってあって買いたい意欲をそそる。
子供のくつは一番アメリカのがよいと云うの
で探した。これは特売でなく、育つ盛りの子
供の足を歩るき易くする事だからとふんばつ
した。ベストの物は品がよい。デパートの中
の特別展示室の大きいものと思えばよい。ク
リヤリングセールで買ったものでも箱はベス
トとかいたうす茶色の箱を下げて町を歩く私
もいささか得意であった。

ドルとおつり

買物をしていざ支払いと云う時、計算がの
ろくて、こちらでいらいらして来る。日本の
ソロバンをふっと思い出す。あんな便利な物
はない。パチパチとやればかんたんである。
スーパーマーケットでは計算機で出してる事
は日本のデパートなどと同じであるが、ベス
トや他の私が行って見た店々はたとへば二ド
ル四十五セントの買物をするとして、一ドル

紙幣を三枚出すと、おつりをくれるのに細かいお金をこれで五十セント、六十セントと云乍いら三ドルになる様に五十五セントを順に出すのである。日本でもそう云う出し方をする所もあるかも知れないけれどまだそう云う経験のない私には頭の中で三ドルから二ドル四十五セントをひいて残金五十五セントと計算してしまう方が簡単である。あちらではどこでも元の額になる様な計算をし乍らおつりを渡してくれる。なれない私には面倒でさっさと頭の中でおつりはいくらと計算しろい係りの人の手つきをみていた。

有料トイレットとチップ

あちらは殆んど有料であつて、トイレットに沢山御不浄があるが、一個所だけ無料のがある。切手に至るまでマリオンが全部支払ってくれている。私がたまたま一人で御不浄へ行った時、五セント、十セントと、ドル以外の細いお金はどれがいくらだか始め分りにくくて困った。仕方がなく近くに居る御婦人に「一寸失礼ですが、この中でのお金をここへ入れればよいのでせうか」と手のひらへ小さいお

金のいくつかをのせて見せた。戸の所にお金を入れると鍵が開く仕かけになっているから入れないと開かない。その婦人はニコツとして「OK、今私が入れるから先へお入りなさい。出て来る時ビシャと閉めないでね」と云つてお金を入れて戸を開け、私を先へ入れてくれた。そして出て来ると「そのままそのまま」と云つて笑い乍ら続けて入ってしまった。あとでこの話をきいた友人達は笑いこらげてしまった。このお上りさん英語でどうかそれを云えるものだからよいものの、もし英語が出来ないでまだ様子を知らないで一人で御不浄へ行ったとしたら大変である。戸は開かないし、お金は分らないしえらい事になつてしまう。お金も一セント、五セントとか云わず十五セントがダイム、五セントがニツクル、一セントがペニー別のよび名があるので、そう云われるとますます分らなくなつてしまう。

ダイムとは何ぞやときけば、それはテンセントと云つてくれる。御不浄へ入るのもよいな事でない。大たい御不浄は十セントと思えばよい。サンフランシスコである立派なホ

テルのトイレットでガマ口からその小さいお金を探していたら黒人のトイレット係りのメイドさんがつと寄つて来て「こう云うお金を入れればよろしいですよ」と云つて見せてくれた。親切な一寸した心づかいがうれしかった。来る時「どうもありがとう」と礼を云うと静かにニコツとした。一寸忘れられない表情であつた。

御不浄の話のついでに私達は御不浄の戸をビタツとしておく習慣がついている。あちらへ行つて始めは出て来る時しめておくと、いつの間にかマリオンが少し戸を開けておくのに気がついた。内部の作り方が日本とちがい、御不浄、洗面所、お風呂等が一つの部屋にそなえつけられてあるせいでこう云う習慣なのかも知れぬ。

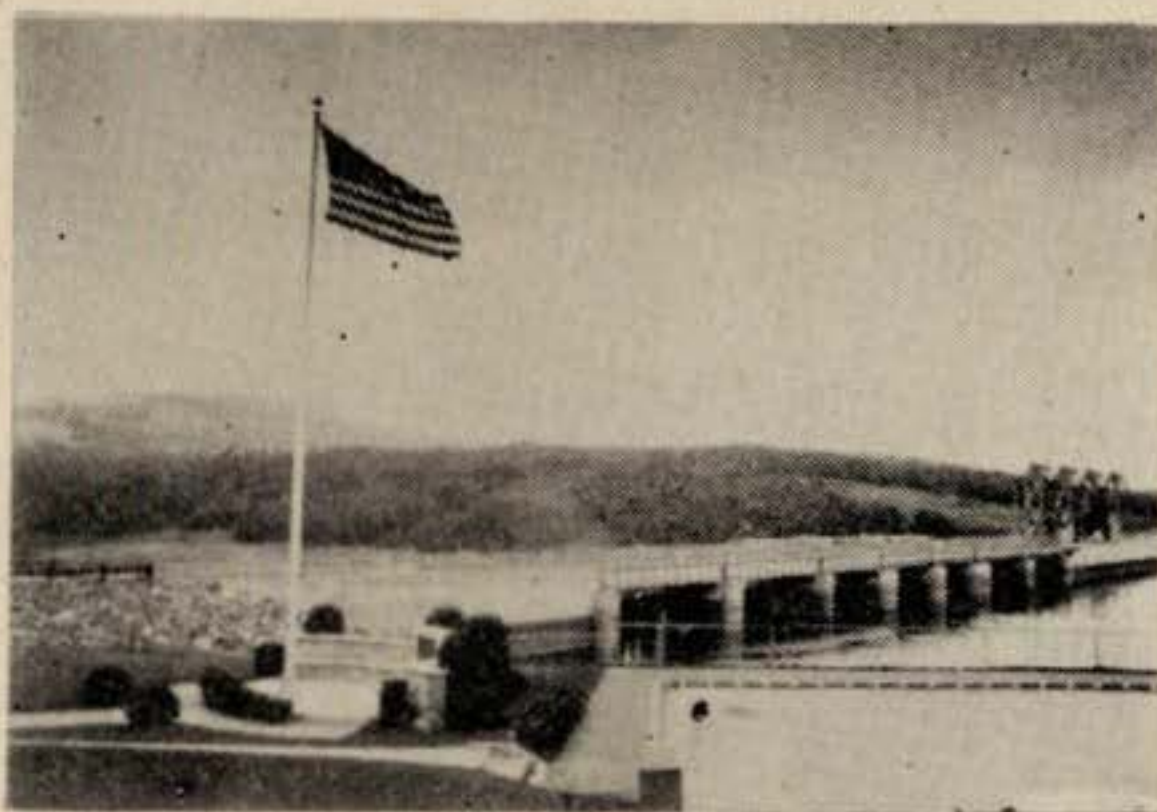
方々の家庭へ招かれたがどこもそうしてあつた。つまり戸が開かれている時は「誰も入っていません」と云う事を示しているのである。そう云えば日本に居る外人の家庭のバスルームもそうであつた事を思い出した。しまつてゐるからと思つて日本式に開けて入つたら大変な失礼にあたる事になる。そしてノッ

クして入っているか確かめる事もいらないう
けである。

或る友人のお母様がサンフランシスコより
六十マイルの南に当る町より私の為にサンフ
ランシスコまで来て下さって、一流のホテル
で日本を知っている四人ほどの方々も一緒に
おひるをもてなして下さった（サンフランシ
スコにはデラックスなホテルが多かった）。
会の後数人のレディー達と再びトイレットへ
入った。お茶目な一人の夫人が十セントを入
れ戸を開けて出て来ると次の人がお金を入れ
ずに入る皆笑ひ乍ら順に同じ御不浄へ次から
次へと入ったのである。私一人の時親切であ
った同じ黒人のメイドさんは横を向いて見て
みんふりをしているのである。ホテルの経営
でもあるから、ホテルへ来てるお客様に注意
も出来ないのであろう。お茶目の奥さん達は
笑い乍ら皆用をすませ揃って出て来たのであ
る。私もその仲間の一人。思わずにが笑いし
てしまった。

ニューヨークを離れる時、細かに必要な費
用をマリオンが計算してくれて特にチップ等
の細かいお金をよく教えてくれたものの、さて

どれをつかうのだったかしら一寸困ったのは
こんな御不浄の中でであった。レストランや
ホテルの食堂で食卓の上へ大たい一割のチッ
プを置いて立つとその係りのウエイトレスがボ



水源池で。国旗を尊重する一風景。

泊った時だけであったとは、有難い友情に包
まれた私の旅の思い出の一つである。

国際連合

どうしても見ておかなくてはならないと思
ったのは国連である。ニューヨークを離れる
三四日前にてマリオンに案内されて行った。
グラントセントラルステーションまで出迎へ
てくれたマリオンと歩いて行く、あまり遠く
ないイーストリヴァー河畔にあの長方形の箱
を縦におこした様な他の建築と全く異なる建物
が現われた。国連である。前の通路に面して
各国の旗が風になびいている。門を入ると前
庭は広々としていて、見学の団体が群をなし
ている。先生に引率されている小学生もいる。
私達の様な一般の見学者は建物に入り奥まッ
た所にある窓口で順番の札を受けとるらし
い。足早にマリオンが一人でそこへ行ったの
で、入場料が必要かどうかは分らなかった。
そして近くに置かれてある待合室の椅子にこ
しかけて待っている。来ている人は主に白人
でここでは一人も日本人は見なかった。「何
番から」と声をかけられて私達は立上った。

これで窓口で番号札をもらうか、「何番です」と云われるかしたのが分った。

インドのサリーをきた婦人が私達を改札口の様な所から数をかぞへ入れて、説明者に引き渡す仕事をしていた。サリーを誇らかにきて働らいている婦人は印象に強く残った。

一度に何組も重ならぬ様に。十分か十五分位待たせては次のグループを中へ入れるらしい。私達に説明をする婦人は二十二三才の学生のような感じの婦人であった。その人について私達はそろそろと歩るき出した各国から集まった説明者の中で、私達についた人は話し出したらキングスイングリッシュなので英国人だと思ったが、マリオンはヨーロッパの人だけど英国人ではないと云っていた。秘かに日本から説明者に来て居られる女の人がついてくればと願っていたが、一時間に渡る見学中一度もその人に行き会わなかった。

さて、先ず広い廊下を右へ折れると庭に朱ぬりの鐘ろうがある。これは日本から寄そうされた説明者はいつていた。世界の人達が手をつないで仲よくしましように云う願いの元に各国の貨幣を集め、つりがねを造ったも

のである。近代建築の国連のこの庭に、完全に趣きの異なる鐘ろうではあるが、おかしく思わなかったのは、国連と云う名のこのビルの中に動く人達からかもし、出されるふんい気のせいであろうか。

何はさておき、アメリカはキリスト教の国、日本は仏教の国と思われているのだから、鐘楼はよい思いつきである。石どうろうは他でも見たし、必ずしも仏教的ではないことから考え、見て恥かしいものと私は思はなかった。それからエレベータにのり各部屋に案内される。一室に入るとこれはスエーデンより寄贈の部屋と云う。デザインはもとよりテーブル、椅子、全部が、その国の特長を出して、全部寄附である。又別の一室はノールウェイより寄贈されたそうで、この室の委員のすわる中央の席の前後の壁には、ノールウェイの画家がかいたと云うすばらしい大きな鈴がかかっていた。その両わきが窓になっていて、イースト・リヴァが絵の続きの様に見えていたが、小船が往来するのをふとみかけて、絵でなく河だと分ったのである。こう云う部屋は、各部門の委員会室、会議室に使用され

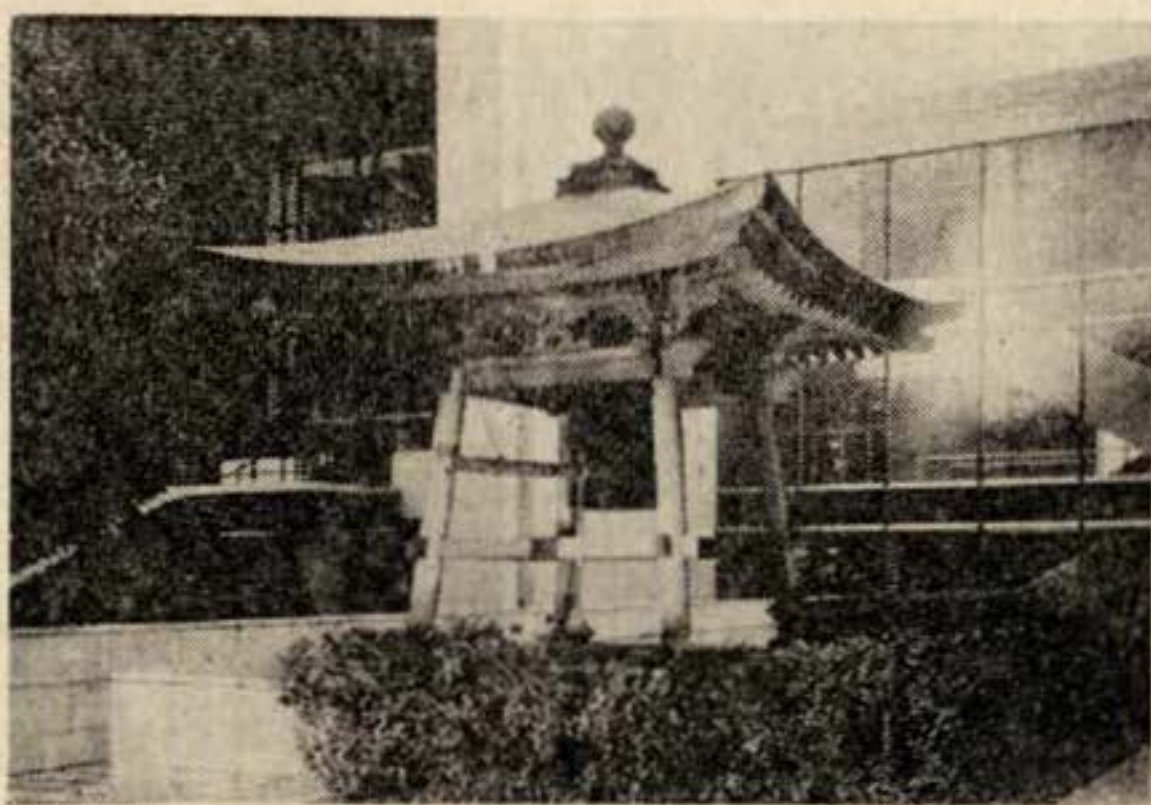
ると云う。ここへ、こしかけて下さいと沢山並んでおかれた椅子へこしをおろす。各国より来たる傍聴者、或は、一般の傍聴者の席らしい。ともかく、そこへこしかけてみられたのである。新聞で毎日の様に国連々々とかかれる。その世界の代表の集る。そして、廊下での立話にも中々かけ引きがうまいとか、下手だとか、と世界の視聴を一つに集める。この国連の一つの室の椅子にこしをおろした私は感慨深いものがあつた。中央との間にはしきりがあつて、しきりの内側にはメインテーブルをかこみ、代表委員のすはる席があり、壁には小さい部屋が沢山目をむけている様に作られている。各国の放送局の人達がそこから中の会議の成行を伝えるのだらう。或る会議室では午後から大事な会議があるとかで、二三の人が準備の為、あちこちと働いていたし、委員か或はアシスタントか分らないけれど、一人席について書類らしいものに目を通している人もいた。マリオンは誰か友人に私を会わせたかったが、午後の会議の準備の為、部屋に居られないとか。午後の会議は重要なものらしいかったので、無理にも探してもら

ことは遠慮した。

最後に入ったのは大会議室である。世界中の国連加入国が一堂に集まるのはこのホールで中央の議長席の後の壁に国連のマークがかけられている。国会の議事堂のやうに各国代表のすわる席が議長席に向い円形におかれてある。左右の壁には二段に分れ、くり抜かれ、その中にテレビジョンや放送の為の小部屋がいくつもくざられて設けられている。フルシチョフ首相も演説をした場所であるし、ケネディ大統領も私がニューヨークにいる間にここでスピーチをした所。しかもテレビでその姿と肉声をきいた私であるから感銘は一段と深い。通路を通る時、所所つなが張っており、それより中に入れない。その中の通路には、各国の代表委員の姿がちらちらとみえている。私達の通って行く廊下を、何か話し乍ら足早に去って行くトルコ帽をかぶった人達の後姿をみ送っていた私は、世界の状況に遠ざかっていただけに、これからすぐ始まるらしい会議に次々と昼食を終え、集まって来る各国の特に印象強く感じるアフリカの諸国の人達をみて、ハマーシャルド事勢総長の死以来の暗

い世界の動きが肌にふれて行く感じであつた。

広い一階のロビーには、これからの会議をほうちやうする一般の人達が、日本と同じや



鐘あるてざにか庭の連国

を走らせている人々をみかける。マリオンは国連の切手で、国連のここだけで押すスタンプを記念にする為、こうしてかりていると説明し、私にもせめて家と次男だけにでもかきなさいとうながす。それではといそいで二通かき、設けられてあるポストへ投入れた。

建物を出るとイースト・リバーから吹いて来る風に数十本の各国の旗がはためいているのを再び見上げる。丁度ニューヨークについたその頃、どこにも半旗がひるがへっているのをみた私は、ハマーシャルド事勢総長の遭難を知らされた。各役所役所にたててある旗竿の三分の二ほどの位置に哀悼の意を表する旗がはためいていたのである。この国連の数十本の旗の中に日の丸の日本の国旗もみる事が出来た。何と云っても旗は国のシンボルである。毎日みる英字新聞ではピンと来ない私にとり、この国連見学は二週間に渡るフロリダ州一周や美しい風景にみせられのんびりとした気持を現実に戻らせるのに大きな力を持っていたのである。

浄

土

宗

八

門

往生について

その三

戸松啓真

(大正大学助教授)

浄土宗の教えの中心は、浄土宗という名が示すように往生浄土思想であるから、今回はそれについて少しのべることにする。

前にものべたように釈尊が自ら体得された「さとり」をもとにして現われた仏教は、いずれの宗派を問わず、その理想とするところはわれわれ凡夫が仏になることであつた。別のいい方をすればそれは、解脱とも涅槃（入涅槃）とも滅度ともいわれるものである。解脱というのは煩惱の束縛から脱却することであり、涅槃とは煩惱が消えてなくなった状態をいうのである。また滅度というのは、われわれの執着を滅して生死の苦海をわたり越え

ることである。いずれも仏教の理想とするところで、なにもものにも執われない絶対自由の境地をいうのである。

これが仏教の理想とか究極の目的であるが、いま浄土教ではこのような理想の境涯に達するのを往生浄土、或は単は往生という語をもつてあらわしているのである。よく考えると、往生も成仏も、従つて解脱ということなども結局は同じ状態をいうのであるが、仏教を自力門、他力門とわけると、自力聖道門は成仏をのべるのであり、他力浄土門は往生を説くのである。それでは、浄土門で何故に仏法の帰結である成仏とは別に、往生を説く

のであろうか。聖道門でとく成仏とは、現世に於てこの身が仏になることを目標とするのである。

しかしわれわれは、現実の自分をふりかへつて見て果してこの世で仏になれるであろうか。全ての苦しみのもとになる執着をたちきることができであろうか。これについて浄土の祖師方は次のように語っている。八新訳浄土聖語集よりV

「この世の中をよく見ると、うそいつわりと、はてしない迷いとにみちている。あたかも尺取り虫がぐるぐるとはてしなくまわるようなものである。またさなぎが

藪の中に自分で自分をとじこめるようなものである。人間はこのような世の中にしばりつけられて、まちがったものであり不浄なものである。」△曇鸞・往生論註V

「人間はその根本にまつわる深い迷いのために、あやまって人を殺したり、財物を貪ったり、女色におぼれたりして、飽くことを知らない。またうわべを飾り、人をたぶらかして、いつわって親しそうにしている。相手の財物がなくなり、容色が衰えると、嫌いになってしまう。そしてすぐに交りを断ち、怨みをいだき、そのような怨みがこの世の中にみちみちている。生きとし生けるもの皆そうである。」△善導・法事讃V

「悪をやめ善を行うことは、もろもろのみ仏のひとしく定めおかれた戒めであるが、今日のわれわれは、みなそむいている。もし阿弥陀仏の救いの誓いによらなければ、迷いを離れることが出来ないであろう。」△法然上人V

これらは浄土宗の祖師方ののべられた言葉の一部にすぎないが、浄土門の教えが人間の能

力と時代とに依じてすすめられたものであることを物語っている。われわれ日常の生活に於ては、煩惱の雲にとざされて迷いの山からぬけ出ることができない。それ故に、凡夫が仏になるのは浄土に「往き生れる」ことによって可能となるのである。

これについて法然上人が、特に念仏信仰を上人にたずねられた二人の女人に対して、次のようにのべているのは興味深い。当時は女人は罪障深く成仏し難いものとされていた時代である。即ち鎌倉幕府の御家人で後に法然上人に帰依した大胡太郎実秀の妻室にあてた手紙の中で、

「衆生の生死を離るる道は、仏の教えさまざまに多く候えども、この頃の人の三界を出で生死を離るる道は、ただ往生極楽ばかりなり。この宗のおおきなるころなり。」△法然上人大胡消息V

とのべられている。また源頼朝の後室政子即ち二位の禪尼へ進ぜられた長文の書のはじめに、

「このたび生死をはなるる道、浄土に生るるに過ぎたるはなし。浄土に生るるおこ

ない、念仏に過ぎたるはなし。」

△鎌倉二位の禪尼へ進ぜられし書V
と書かれている。

法然上人はわれわれ凡夫にとって「生死を離れる道」即ち迷いがなくなつてさとりへ行く道は、往生浄土以外にはないことをはっきりとのべられている。そして浄土に往生すれば、われわれ凡夫も必ず成仏できるのである。十地の願行が自然に成就して仏になれるのである。されば無量寿経に説かれる阿弥陀仏の四十八の本願の中にも、「往生定聚」(第十一番目)及び「得不退転」(四十七番目)の誓願があり極楽に往生した者は「正定聚」といって正しく成仏を決定した人々の仲間となり必ず滅度に至るのであり、「不退転」といって成仏する位が定つて再び退転することがないのである。

前にのべたように仏教に求むるところは、転迷開悟即ちさとりである。曇鸞、善導、法然その外多くの浄土祖師方が時代環境と人間の能力をふりかえり考えた時、実現できない道を求めたのではなくて、凡夫であるわれわれ誰にでも可能なる道として、何をおいても

浄土往生、念仏往生を第一義としたのである。ここに浄土教に於て往生を説く根拠があるのである。

それでは「往生」とはどのようなことを云うのであろうか。往生とは極楽浄土へ「往いて生れる」ことである。法然上人の書かれたものの中では一番早いものと思われる――恐らく四十三才叡山を下りた前後にかかれた――「往生要集」に、「往生というは、此を捨てて、彼に往き蓮華に化生するなり。草庵に目を瞑ぐの間、すなわち是れ蓮台に跌を結ぶの時なり、弥陀仏の後に従い、一念の頃に、西方極楽世界に生ずることを得。故に往生というなり。」とのべられている、「此」とは此岸即ちこの穢土のことであり、「彼」とは彼岸即ち西方浄土を指すのである。そして往生がわれわれのこの世の生の終り即ち肉体の死を境にして成就されることを示している。

往生がこのように具象的にのべられているのであるから、往生の形式から云えば、それは「現在の生の状態が転変して他の生の状態となること」へ浄土宗読本Ⅴともいえるし、また「この娑婆世界から彼の浄土への転換形

式」へ浄土の教義とその教団Ⅴともいえるであらう。徳本上人が「必ず必ず死ぬるのぢやないぞよ。仏法は死ぬる法は教えはせぬ。死なぬ法を教えるのぢや。往生という字は死ぬるという字に書きはせぬ。往き生ると書くぞよ。この通り心得て、精出して御念仏申さっしゃるがよい。さっぱりと死ぬるのぢやないぞよ。極楽へ生れるのぢや。」へ勸誡聞書Ⅴといわれ真の往生とは遅かれ早かれ、やがては死なねばならないこの私が、阿弥陀仏の限りない生命となにもものにもさえぎられない光明のただ中に、永遠に死ぬことのない私、否、な生と死とを越えた私と生れかわることである意をのべられても、浄土教で昔から説かれた往生は死を契機とするものであった。それは厭離穢土欣求浄土といわれるものであった。

往生が浄土に於ける新しい生を意味するものであっても、現実には現世の死を媒介とする以上、それは臨終来迎や臨終正念の臨終信仰を要請することになるのであった。事実、善導や恵心の往生思想には、「臨終正念訣」や「臨終行儀」にのべられているように臨終

信仰の性格があった。それらの時代に前後して作られた各種の往生伝にもそれが見られるのである。往生思想がこのような臨終信仰即ち死を契機とした死後往生の信仰に止るならば、この世に於て達することのできない生の欲望を、死後にみたすという自己満足にすぎないものとなろう。この話の第一回の始めにのべたように、宗教とか信仰というものは、それを実践することによって、価値の変換、生命の改革というようなものがあらわれるものでなければならぬ。このような日常の現実生活の立場から、法然上人の往生思想が人間の現実生活にいかなる意義を持つのであるか。次にそれについてのべたいと思う。

★

★



編集後記

▽迷って信仰に入る人びとをみると、その大部分が、窮苦、貧乏、不平等を機縁として入信する場合が多い。その際、科学的教養がとぼしいことが大きな原因であるが、更にもう一つ、宗教についての正しい理解が欠けている場合が非常に多い。だから、最近では相当のインテリとおもわれる人が、宗教と科学を混合して迷信にこりかたまっている人がいる。勿論信仰が身についてくると、不思議な徳がそなわり、利益をいたくすることも事実であるが、最初からソロベン片手の信心は間違いであろう。とくに創価学会の入信のすすめ方は言語に絶するもの

がある。正しい宗教の理解と信仰へのみちびきがつよくのぞまれるのである。

▽その要求に応じて「信仰へのみちびき」佐藤賢順著が再版された。檀信徒への施本としては恰好のパンフレットである。

▽本誌連載のアメリカ旅行はなかなか好評である。アメリカの家庭生活をもっと詳しく書いて欲しい、黒人問題はどうか、等いろいろ希望や問合せが寄せられている。武田泰淳、吉屋信子氏らの作家の方々よりも色々感想やらアドバイスがとどけられている。筆者も、それにこたえて、記憶のうすれたところはアメリカの友人にじかに問合せたり、仲々努力をされている。

が東京大正大学で開催される予定である。宗門が分裂しているさなか、教学だけ一体化して研究活動が続けようと、昭和三十年より年一回東西合同して教学大会をおこなって来た。今年のは第八回である。教団のパクボーンである教学興隆の具体的方策についてのシンポジウムも予定されている。

▽大自然の恵みが豊かなみのりを得る時節である。正法弘通の秋一層御自愛御精進あらんことを。(宮)

× × ×

× × ×

「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一カ年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 十月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便認可

昭和三十七年九月廿五日

昭和三十七年十月一日

定価 五十円

編集人 村瀬秀雄

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

会社

東京都千代田区飯田町一ノ廿一

発行所 法然上人顕仰会

電話東京三三二一五九四四番

横濱東京八二一八七番

浄土トラクト

大正大学教授・文博 佐藤賢順 著

再版

信仰へのみちびき

B 六版・十六頁
定価十五円 十円

目次

- 1、大慈悲の仏教
- 2、知性を超えて
- 3、美的情感を超えて
- 4、本願の不思議にて
- 5、すべてを包む愛
- 6、人生は信ずる心から
- 7、お導びきのまゝに

村瀬 秀雄 著

月影抄

御法語の栞

B 六版・十六頁
定価十五円 十円

目次

- 1、上人のご日常（われ聖教を見ざる日なし）
- 2、浄土宗の意義（われ浄土宗をたつる心は）
- 3、道を求む（かくの如くして昨日もいたづらに暮れぬ）
- 4、決定の信（我は烏帽子もきぬ法然房也）
- 5、弥陀名号の功德（無礙光とは）
- 6、信仰のすがた（つみは十悪五逆のものも）
- 7、念仏を勧める（不軽大士の杖木瓦石を）
- 8、あとがき

申込先 法然上人鑽仰会

振替 東京八二二八七番

東京都千代田区飯田町一ノ二

日本一の生産・設備

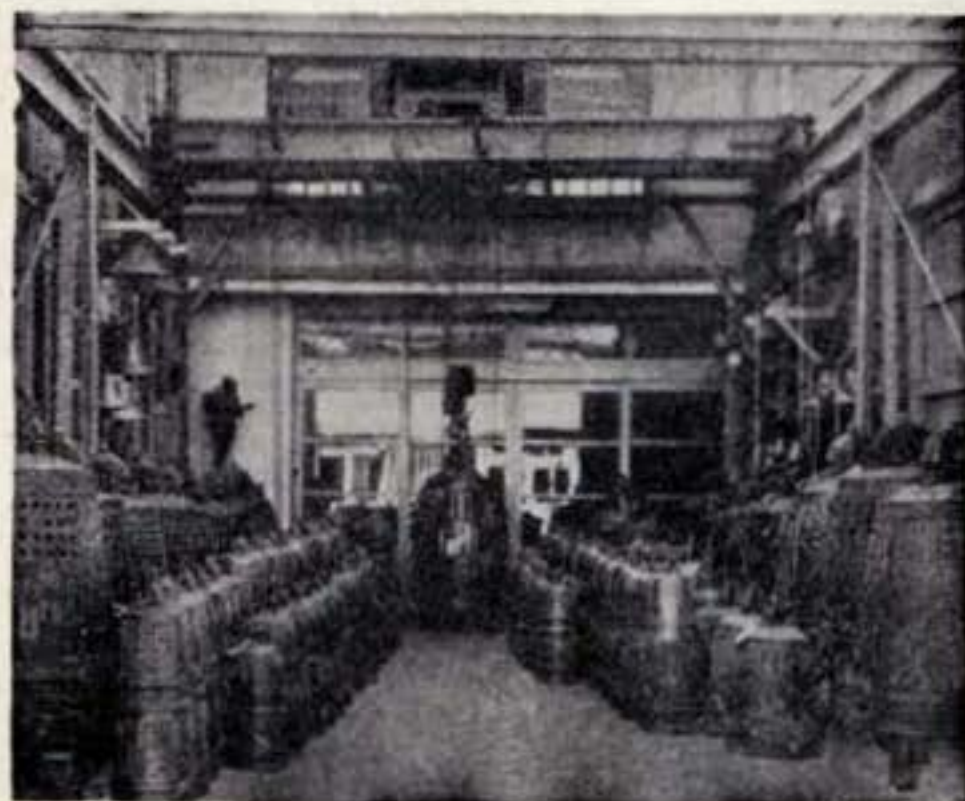
梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事香取正彦先生
芸術院賞受賞



鑄物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分（梅田新道大映横東へ一丁右側）

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 040 8847番 本社工場 高岡市横田